

琉球大学学術リポジトリ

養護教諭の教師教育に関する研究： 健康相談活動に着目して

| | |
|-------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2017-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高宮城, 辰代 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/36797 |

養護教諭の教師教育に関する研究

－健康相談活動に着目して－

高宮城辰代

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻

1. はじめに

近年、子どもの健康問題が複雑化・深刻化し、保健室を訪れる子どもの心身の健康問題がクローズアップされ、その対応が求められた。言い換えるならば、養護教諭は、子どもの身体的不調の背景に、いじめや心の健康問題などが関わっていること等のサインにいち早く気づく立場にあり、子どもの心と体への両面への対応が求められていると言える。つまり、これが、養護教諭の「健康相談活動」としての新たな役割となった。

健康相談活動は、1997年9月の保健体育審議会答申において、新たな養護教諭の役割として提言された。2008年の中央教育審議会答申においても、今日の保健室来室状況を踏まえ、健康相談活動がますます重要になってきていることが述べられている。

養護教諭の行う健康相談活動場面は、日常活動の一環として自然に行われていることが多く、さまざまな問題や悩みを抱えた子どもが保健室に来室する。それに対して養護教諭は、相談内容や子ども個人の状況や実態にあわせた対応をしている。力丸（2012）らも、「今日に至るまで『健康相談活動』は、学校現場における養護教諭の日々の実践をはじめ、養護教諭養成や現職教育等の関係者の創意工夫によって充実しつつある」と述べている。言い換えるならば、複雑化している社会情勢から、学校現場での子どもが抱える問題も多様化している。その対応をしていく一人として、養護教諭の果たす役割は大きいと考える。

一方沖縄県においては、子どもの貧困率が29.9%と、2012年時点の全国平均16.3%の約1.8倍をしめ、深刻な状況が明らかである。特に、母子世帯での貧困率は58.9%と高い値であること、平均所得が低いことから深刻な状態であることがうかがえる。これらの状況から、貧困の子どもへの影響は、生活のみならず学力や精神的な面でも多大である。

つまり、沖縄県の学校における子どもの心身の健康問題の背景には、貧困の問題が根底にあることが考えられ、それに起因する問題や悩みを抱えている子どもへの対応には、養護教諭が果たす健康相談活動はますます重要である。このように、多様な状況に善処していくためには、養護教諭の健康相談活動には、広い分野からの専門的な知識が求められてくる。しかしながら、養護教諭の養成課程においては、基礎的な学びはあるものの、個々の事例や、困難な事例についてのより専門的な知識の習得までには至っていない。

そこで本研究では、養護教諭の健康相談活動時の対応について、基礎的事項をおさえた上で、養護教諭の健康相談活動に必要な専門的知識や技能、学校現場での養護教諭の子どもへの対応や、必要と感じている専門性について、現職養護教諭へのインタビューから探っていき、学校における健康相談活動の充実につなげていきたい。

2. 研究内容

(1) 健康相談活動の意義

1997 年保健体育審議会答申にて、「健康相談活動とは、養護教諭の職務の特質や保健室の機能を十分に生かし、児童生徒の様々な訴えに対して常に心的な要因や背景を念頭において、心身の健康観察、問題の背景の分析、解決のための支援、関係者との連携など、心や体の両面への対応を行うものである」と定義づけられている。また、養護教諭に求められる資質として「心の健康問題と身体症状」に関する知識理解、これらの観察の仕方や受け止め方等についての確かな判断力と対応力(カウンセリング能力)、健康に関する現代的課題の解決のために個人又は集団の児童生徒の情報を収集し、健康課題をとらえる力量や解決のための指導力が必要である。その際、これらの養護教諭の資質については、いじめなどの心の健康問題等への対応の観点から、かなりの専門的な知識・技能が等しく求められている。

(2) 沖縄県内養護教諭養成大学の健康相談活動における授業計画と内容

沖縄県内の養護教諭養成大学における、養護教諭免許状取得科目「健康相談活動と理論及び方法」の比較を表 1 に示す。

表 1. 琉球大学・名桜大学シラバス

| | 琉球大学 | 名桜大学 |
|-----|--------------------------------|--------------------------------------------------|
| 科目名 | カウンセリング論 | 健康相談活動の理論と方法 |
| 1 | オリエンテーション | オリエンテーション(科目の紹介、授業計画、評価方法、履修条件、学習の構え等)養護教諭と健康相談) |
| 2 | カウンセリングとは | 養護教諭と健康相談(生きるとは、人間存在、人の一生) |
| 3 | カウンセリングの基本的理論Ⅰ:クライアント中心療法 | 健康相談の概念と特質 |
| 4 | カウンセリングの基本的理論Ⅱ:精神分析 | カウンセリングの理論と技法(演習) |
| 5 | カウンセリングの基本的理論Ⅲ:行動療法・認知行動療法 | 健康相談の基礎と背景(子どものヘルスニーズ理解、健康相談の基礎) |
| 6 | 養護教諭や看護師等のためのカウンセリング技法 1 | 健康相談の実際(健康相談活動の進め方基本) |
| 7 | 養護教諭や看護師等のためのカウンセリング技法 2 | 健康相談活動の進め方の実際① |
| 8 | 臨床心理士によるカウンセリング事例の紹介 | 健康相談活動の進め方の実際② |
| 9 | 演習 | 養護教諭の役割と連携及び養護教諭の新たな役割 |
| 10 | さまざまな“相談”と心理カウンセリング | 諸問題の捉え方とかかわり方(相談支援の原理) |
| 11 | 学校で行われる“相談”～特に養護教諭が行う“健康相談”の特徴 | 諸問題の捉え方とかかわり方(事例に学ぶ)※保健室来室の対応事例作成(レポート) |
| 12 | 臨床心理士(学校 スクールカウンセラー)との連携 | 諸問題の捉え方とかかわり方(事例に学ぶ:作成した事例検討) |
| 13 | 臨床心理士(医療 心理職)との連携 | 健康相談活動における記録(実技・実習)健康相談に関する学習方法及び実践研究の報告 |
| 14 | 集団を対象にしたカウンセリング | 健康相談についての力量形成と研究 |
| 15 | 沖縄における野のカウンセラーと保健医療との関わり | 健康相談活動の進め方の実際(実践例) |

琉球大学は「一般的な心理カウンセリングと養護教諭が行う健康相談との異同と臨床心理士との連携」について、名桜大学は「健康相談活動進め方(健康観察、ヘルスアセスメント、カウンセリング的な対応、関係者・関係機関との連携)」に重点があることがうかがえる。

課題研究中間報告

佐藤ら（2015）によると「健康相談・健康相談活動は、保健室来室児童生徒に対する対応については養護教諭の専門性を生かして概ね実施されていることが明らかになった。しかし、支援協力者との連携においては、経験年数を補う研修の必要性及び健康相談・健康相談活動に特化した研修の必要性が課題」と述べられている。また、久保田ら（2004）も「健康相談活動を正しく理解することが、全現職養護教諭の課題である」と述べ、養護教諭養成校卒業後も継続した研修の必要性が明らかとなった。このことから、養護教諭が学校現場で健康相談活動を進めていくためには以下のことが、養成教育及びその後のフォローとして重要であると考えられる。

- ・健康相談活動についての意義を知る
- ・養護教諭同志の研修が必要である（研修会の立上げ）
- ・関係者及び関係機関との連携のあり方

3. 結果と考察

(1) 養護教諭の子どもへの対応

養護教諭の子どもへの対応から、健康相談活動における専門性について、身体的な訴えのないA男（小2）への対応事例を通して得た知見について考察してみる。

1時間目の休み時間、小学2年生のA男は伏し目がちに保健室に来室した。身体的な訴えはないがうつむいたまま、養護教諭のもとに近づいてきた。養護教諭は、「どうしたの」「頭が痛いのか」「今の授業何の授業だったの」と声かけをしながら問診し、体温を測った。体温は正常範囲だったが、養護教諭は「1時間休もうね」と保健室で休息させた。1時間休息後、体温を測定、「どう、がんばれそう」という声かけに「大丈夫」と答え、A男はすっきりした顔をして教室へ戻っていった。A男はその後も同じようなことで保健室に来室することがあったが、保健室で休息した後は、教室へ戻ることができていた。

養護教諭が行うA男への対応は、まず身体の不調がないか身体への手当てを実施。その後は、精神面の対応として「授業中に不安な状態」になったとの判断から、保健室で休息させる。

このような対応策は、A男、学級担任、養護教諭の間でのケース会議にて計画されていることがインタビューを通して理解できた。また、保健室でのA男への対応や状況を適宜学級担任へ報告し、学級担任からは学級での様子を情報収集するなど、A男の現状のみで判断することなく、その背景（家庭状況、友達関係、これまでの経過等）を把握し、A男への対応として、計画・実践していた。さらに、保健日誌を作成し、日々の子どもの健康状態・保健室来室状況等を管理者へ報告するなど、学校全体で情報を共有できるような体制づくりをしていた。

以上のような養護教諭の子どもへの対応から以下のことがわかった。

- ・健康相談活動における基本的な知識・技能の重要性（実態把握、特性等）
- ・関係教職員との連携（情報の共有、ケースへの対応等）
- ・マネジメント力（管理者への報告、対応の計画・実践）

(2) インタビュー項目について

課題発見実習を通して理論研究から得られた内容と、実際の養護教諭の子どもへ

課題研究中間報告

の対応から、健康相談活動として必要とされる専門的知識を探るため、インタビュー項目について整理し、養護教諭数名にインタビューし、分析検討していきたい。

- ・健康相談活動をすすめるために必要な力量とは何か
- ・健康相談活動に関する学習方法
- ・健康相談活動をすすめる中で困っていること・困った時の対処方法
- ・保護者・教職員・関係機関との連携について

4. まとめ

養護教諭が行う健康相談活動は日常自然に行われている。保健室に来室する子どもに対し、子どもの訴えと表情や態度、または来室時の人数などから、子どもは今何を求めているのかを観察・把握し、問題を推測しながら判断する。その時身体だけの問題だけか、心因が推測されるかアセスメント・判断する。心理的要因が推測されても、まず、身体的なケアを実施するという基本的な視点や対応を実践されていることが明らかになった。また、子どもと養護教諭の間に信頼関係を構築すること、すなわち、コミュニケーションをとり、子どもが来室しやすい保健室や雰囲気を作ることも重要だと考える。

先行研究から健康相談活動の重要性や、現職養護教諭への研修の必要性が明らかであるため、沖縄県での養護教諭の研修内容の実態把握も必要になってくる。

健康相談活動における専門的な能力においては、基本的な視点を持つこと、教職員との連携、毎日の健康チェック、保健日誌作成、管理者へ報告など、基本をしっかりと実践することやマネジメント力・コーディネート力の重要性がわかった。

5. 今後の研究の方向性

健康相談活動に関する先行研究の分析、現職養護教諭の健康相談活動場面の観察、インタビュー項目を作成し、現職養護教諭へインタビューを実施し分析検討する。また、課題解決実習での実践を通してさらに研究を深めていきたい。

文献

久保田かおる・三木とみ子(2004).「健康相談活動の実践方法に関する研究：心身の相関理解と養護教諭の資質・能力を生かした健康相談活動の在り方の研究」『女子栄養大学紀要』(35), pp.61-69.

文部科学省(1997).保健体育審議会答申「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について(答申)」http://www.mext.go.jp/b_menu/shinigi/old_hoken_index/toushin/1314691.htm(2016.12.10 現在).

力丸真智子他(et al)(2012).「養護教諭の「健康相談活動」に活かすヘルスアセスメントに関する研究」『学校保健研究』(54), pp.162-169.

佐藤倫子・今野洋子・照井沙彩(2015).「養護教諭の健康相談・健康相談活動の実態から捉えた課題：小・中学校養護教諭対象の質問紙調査から」『日本健康相談活動学会誌』(10), pp.90-99.